

令和三年度 日高看護専門学校 入学試験問題

〔一般〕

〔国語総合〕

(時間：六十分)

《注意事項》

- 1 試験監督者の指示があるまで問題冊子は開かないでください。
- 2 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があります。監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。
 - ① 氏名欄に、氏名・フリガナを記入してください。
 - ② 番号欄に、右詰めで受験番号を記入し、その下のマーク欄にマークしてください。
正しくマークされていない場合には、採点できないことがあります。
- 3 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄にマークしてください。
国語の問題は全部で三十八問あります。解答用紙の問一から問三十八までの解答欄を使用してください。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験終了後に問題冊子を回収しますので持ち帰らないでください。
- 6 問題冊子の所定の欄に受験番号を記入してください。

受 験 番 号

□ 1 次の問いに答えなさい。解答番号は□1)～□5)。

問一 次の作品の中で、作品の書かれた時代が違つるものを一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は□1)。

- ① 平家物語 ② 竹取物語 ③ 宇治拾遺物語 ④ 徒然草

問二 次の書き出しで始まる作品の題名を選び、番号で答えなさい。解答番号は□2)。

えちこ かすが
越後の春日を経て今津へ出る道^{いまつ}を珍しい旅人の一群^{ひとむれ}が歩いている。母は三十歳^こを踰えたばかりの女で、二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。

- ① 氷壁 ② 暗夜行路 ③ 山椒大夫 ④ 羅生門

問三 次のうち、敬語の使い方が誤っているものを一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は□3)。

- ① 叔父様、私の年齢は、もう十六でございますよ。
② 明日先生に用事で学校を休みますと申しなさい。
③ あなたの「飯が残ったらそれを犬にさしあげなさい。
④ 私の母は、女手一つで三人の子供を育てあげました。

問四 「完全無欠」と同じ漢字の構成で成り立っている四字熟語を一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は□4)。

- ① 花鳥風月 ② 悪戦苦闘 ③ 利害得失 ④ 意味深長

問五 次の傍線部の語句と同じ品詞が用いられているものを、あとから一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は□5)。

夜^よの海は静かだ。

- ① 明日の仙台は、晴れそうだ。
② 私の弟は、米国の外科医だ。
③ 看護師さんは天女^{あまのむすめ}のようだ。
④ 彼は、誰に対しても親切だ。

□ 次の文章を読み、後の設問に答えなさい。解答番号は□(6)〜□(22)。

法輪寺の三重塔は飛鳥時代の美をそのままに、私の子供のころには、その地にひっそりとたっていました。しかし、昭和十九年、落雷によって焼けてしまったのです。

この三重塔を再建しようとして、法輪寺の先代のジユウシヨク井上慶覚さんが浄財の喜捨をおこころとしました。作家の幸田文さんはシザイ^bをなげうって、これに協力されました。お父さんの幸田露伴が「五重塔」の名作で世に名をのこされた因縁もあったからだといわれています。そしてこの塔は、数年まえに再建されることになりました。設計者は、竹島卓一博士。つくった棟梁は、法隆寺大工西岡常一さんです。

しかし、ここに問題がありました。先代のジユウシヨクさんは西岡さんに、あなたの思いどおりにつくりなさいといったのだそうです。しかし竹島博士の設計図を見たとき、西岡さんは、このとおりやれ¹というのならばやめさせてもらいますといってことわったのです。

法輪寺の旧三重塔は、推古天皇三十年、六二二年に建設されたといわれていますが、江戸時代の正保二年、一六四五年、台風のために吹きとばされて、九十二年のちの寛文二年、一七三七年になって補修されたと伝えられています。明治三十年代に解体修理がおこなわれ、その際につくられたジツク^c図がのこっていました。これをもとにして、竹島博士は、昔どおりの塔に復元しようとして設計図をひいたのです。

しかし現代の構造力学上からいうと、どうしても昔の設計に無理があると考えました。そこで、外形はおなじようにし、重いものがささえられるように、補強として鉄をつかう設計図を書いたのです。

西岡さんが、この設計図を見て、だめだと考えたのは、この鉄で補強するという点でした。

「なるほど鉄は力が強い。」
□ A 生命力がない。法華寺の三重塔は明治三十年の解体修理で鉄のボルトが使われたが、それも八十年そこそこの現在、すでにさびて、ねじ山は消え、ぜんぜんきかなくなっていて、それが塔をゆがめるゲンイン^dになっていた。

「低温長時間で、じつくりつくり、生命が長いとされた昔の鉄でさえこのとおりなのである。まして現在の、高温、短時間でつくる鉄は「水くさくて」弱い。一か所のさびがたちまち全体にまわって、さびのかたまりになってしまう。」
□ B 鉄がさびるときに、同時に木をもくさらせる。木材に穴をあけ、鉄をとおして、しめても、鉄がさびるとともに木がくさり、穴は二倍もの大きさにひろがり、木の力をそこない、修理には木材をも、とりかえなければならなくなる。つまり、くさるといふ鉄の、短いのちが、塔全体のいのちを、はやく終^{おわ}らせてしまうのである。

「だが、檜^{あそび}の木だけならば、作り方しだいで、生命力は強く、長い。もし私に思いどおりにつくらせてくれるならば、千年たつてもいのちをながらえる三重塔を、飛鳥時代の工人たちの技法にしたがつてつくってみせる。」

「だが、この設計図のように鉄を入れこんでつくったのでは、短いのちしかないにちがいない。そのようなものをつくる気にはどうていられない。」

「このようなことを西岡さんはいって、この設計図どおりにつくることに反対したのです。これにたいして竹島博士

はつぎのようにいます。

焼けた法輪寺の塔は、世界最古の木造の三重塔として名塔のほまれの高いものであった。しかしなにごんにも千三百年ものまえの建築であるから、今日の建築学の水準から見ると、構造的に欠点がある。今回の再建はなんといつても昭和の『新築』であるから、基本的な形や構造をかえない範囲で構造を合理化し、欠点をおぎなう程度はしてもいいのではないか。そして近代建築学のセイカである構造計算を入念におこない、それによって重さのかかり具合を計算し、それに耐えるように必要最低限度の鉄材を加えることにふみきった。

ところが、宮大工の家につたわる秘術のまえには、今日の建築学的ハイリヨなどはまったく子供の遊びとしてあつかわれてしまったのである。設計の趣旨はズイシヨ^gでゆがめられ、遠大な将来をみこした計画はふみにじられてしまった。

——これが竹島博士の批判です。

みなさん、この近代建築学をグシした竹島卓一さんの考えと、昔からつたわる法隆寺の宮大工の技法からくる経験の英知^{II}と、いずれが正しいのでしょうか。

もつとおもしろいのは、最近の製鉄法——高炉と転炉でつくられる鉄などは水くさくて弱いという、西岡さんのことばです。

もつとも、「鉄が水くさい」というのは、私にはわかりません。しかし、慶長時代つまり一六〇〇年ごろと元禄時代に修理された法隆寺には、そのころ鍛造された鉄のかすがいが使われています。これで補強したのです。この鉄はうすい鉄が何枚もの層になって、さびても表面から一枚ずつめくられて、全体としてながもちするような形になり、昭和の現代の鉄とはかなり耐久性がちがいます。とはいっても、それとて昭和の現代にポロポロになって、さびてしまっています。

再建された法輪寺三重塔は、西岡さんと竹島さんのダキヨウⁱの産物で、一部鉄が使われたのです。西岡さんは、私の考えが正しいか、竹島先生の考えが正しいか、それはやがて歴史が証明するであろうといっています。

なるほど、建築学の先生が構造的に木の力をはかれば、たしかに竹島さんのいうように木だけでは力が弱く、無理なのかもしれません。

しかし西岡さんがつくろうとしているやり方をみると、構造力学だけではすまないものがあるのかもしれないと思えるふしがあります。

西岡さんはこの法輪寺三重塔を建設するために、千五百年の樹齢の檜を求めて日本を歩きまわり、やがて台湾にゆき、新高山の中腹でめざす木をみつけ、これを切りだし、日本に送りました。そしてみずから製材のシキ^jをとりました。どこに使うからどのようにというような、こまかな計算の上に製材したようです。

なぜこうしたのでしょうか。西岡さんは語ってはいません。しかし、おそらく彼がおこなったのは、木の将来の狂いまでを計算に入れたのでしょう。

木は切りたおしたときよりも年限がたてば、だんだん、だんだん、固くなります。四十年、五十年、ますます固くは固くなるでしょう。それとともに、そってきます。ある一定の年齢をこえ、そして、ふたたびもろくなつていく

のです。四百年間固くなりつつける木もあるのです。

(伊東光晴「君たちの生きる社会」より)

- 問一 傍線部 a～j と同じ漢字が用いられているものを、次からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は [6]～[15]。
- a ジュウシヨク [6] ① 公団ジュウタクが当たる。 ② ジュウジツした人生。
③ ゲンジュウな警戒。 ④ ジュウドウの達人。
- b シザイ [7] ① 支局のジョウザイ員。 ② 沈没した船から海賊のザイホウを発見する。
③ 法廷でムザイを勝ち取る。 ④ 医者から渡されたゲザイを飲む。
- c ジツソク [8] ① キソクを守る。 ② 先祖のソクセキをたどる。
③ 敵のソクメンから攻撃する。 ④ 天体カンソク。
- d ゲンイン [9] ① ゲンマイは体に良い。 ② 不思議なゲンショウ。
③ ゲンシ時代。 ④ 人間の体力にはゲンカイがある。
- e セイカ [10] ① 強いセイシン力が必要だ。 ② セイジツな人は信頼される。
③ 月面着陸にセイコウする。 ④ セイケツな服装。
- f ハイリョ [11] ① お紙をハイケンしました。 ② ハイフ資料。
③ 奴隷制度をハイシする。 ④ ハイクを詠む。
- g ズイシヨ [12] ① シヨサイにこもる作家。 ② シヨミンの味方。
③ シヨヨウで出かける。 ④ 水戸黄門のシヨコク漫遊。
- h クシ [13] ① 世田谷クミンになる。 ② ゴキブリをクジヨする。
③ 子育てにクロウする。 ④ ムクな赤子。
- i ダキョウ [14] ① 復興にキョウリヨクする。 ② 小学校のキョウシになる。
③ 彫刻にはキョウミがある。 ④ キョウツウ試験を受ける。
- j シキ [15] ① キオクカに優れた少年。 ② このキカイは壊れている。
③ 看護のキホンを学ぶ。 ④ 実力をハツキする。

問二 空欄 A・B にあてはまる接続語として最も適切なものを次から選び、それぞれ番号で答えなさい。解答番号は [16]・[17]。

- A [16] ① つまり ② しかし ③ すると ④ また
- B [17] ① あるいは ② そして ③ ところで ④ ただし

問三 二重傍線部Ⅰ「ほまれ」・Ⅱ「英知」の意味として最も適切なものを次から選び、それぞれ番号で答えなさい。

解答番号は(18)・(19)。

I (18) ① もの珍しいこと ② 古くから知られていること

③ 評判の良いこと ④ 華麗できらびやかなこと

II (19) ① 洗練された思考 ② 優れた知恵

③ 先見の明 ④ 哲学的な考え

問四 傍線部Ⅰ「このとおりやれというのならはやめさせてもらいます」とあるが、その理由として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は(20)。

① 設計図どおりに、鉄で補強すると、やがて鉄がさび、一か所のさびがたちまち全体にまわって木もくさり、塔全体のいのちを早く終わらせてしまうことになるから。

② 学者の考え方は、三重塔のこれからのことを考えない浅はかなものであり、言うとおりにすること
は、自分の今までやってきたことが全否定されるから。

③ 宮大工はこれまでの経験から三重塔の修復には何が必要で何が不必要なのかわかっているのに、学者は何も知らないためこのままでは修復ができなくなるから。

④ 宮大工は何百年の間、いろいろな寺院や塔を修復してきたのに、たかだか数十年の知識しかない学者の言うことを聞くことは、自分のプライドが許さないから。

問五 傍線部Ⅱ「遠大な将来をみこした計画はふみにじられてしまった」とあるが、このことの説明として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は(21)。

① 自分は学者としての見地から何の利益も考えずに設計図を出しているのに、宮大工は自己の利益だけを考
えて、この設計図をないがしろにしてしまったということ。

② 宮大工の考え方は科学とほど遠く、このままでは三重塔の耐用年数が早くきってしまうのに周囲が宮大工の
味方をしたことによって、計画がなくなってしまったということ。

③ せっかく近代建築学の粋を尽くして、三重塔を長いこと持たせるための設計図を作ったのに、宮大工の考
え方で、それが台無しになってしまったということ。

④ 三重塔の修復は、専門家の知識が不可欠なのに、経験も浅く、勘だけに頼る一人の宮大工が自分の主張を
押し通したことによって、何もかも失われてしまったということ。

問六 この文章の表現の特徴として、最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① 竹島博士の西岡さんに対する反対論には問題点が感じられるということを、観念的に説明している。
- ② 西岡さんの考え方には構造力学上ではすまないものがあるということを実例を挙げて説明している。
- ③ 宮大工の経験と科学が融合して、三重塔の修復が行われたということを平易な文章で説明している。
- ④ 竹島博士の指摘には、現実には聞きのがせない点があるということを、構造力学的に説明している。

三 次の文章を読み、後の設問に答えなさい。解答番号は 23 38。

おふくろは、紙に何か文字を書くときはきまつて鉛筆で書いていた。鉛筆以外の筆記用具——毛筆だとか、万年筆だとか、ペンだとか、家になかったわけではない。けれども、おふくろはいつも鉛筆を使っていた。それも、手のひらの中にすっぽり隠れてしまふほどにちびた鉛筆ばかりで、芯しんもまるくなったのを使っていた。

それでは書きにくいだろうから、少し削つてやろうか、と言うと、要らない、と言う。芯がとがっていると、いまにも折れそうな気がして、思うように書けない。それに、書くといってもべつにたいしたことを書くわけでもないのだから、ほっとしてくれ、とおふくろは言った。

実際、おふくろは鉛筆を使うといっても、たいしたことを書くわけではなかった。 A 文章なんぞを書くわけではなかった。手紙だつて文章だから、おふくろは手紙を書くわけでもなかった。私は、おふくろがだれかに手紙やはがきを書いているのを一度も見たことがなかった。それでは何を書くのかというと、忘れないためのちよつとしたメモのたぐいである。久しぶりに手紙をくれた人の住所とか、買い物aのビンaモクとか、漬物を漬け込む日程とか、そんなものを古封筒の裏や、新聞紙の切れ端や、はいだ日めくりのヨbハクなどに書き留めていた。

おふくろは、文字など書くのは X であつた。たとえちよつとしたメモのようなものでも、それを書くときは難なんじゆう渋じゆうした。見ていると、まず鉛筆の芯をちよつとなめる。それから、力を入れて「し」と書く。すぐ、つかえる。鉛筆の尻で頭を搔かく。また「し」と書く。つかえる。今度は左右の腕をぼりぼりと搔かく。

「なるほど、かいてるなあ。」と言つて冷やかすと、「黙つてなせ。」と、おふくろは怒る。のぞいて見ようとすると、「わかんね。」と言つて、子供のように両手で隠す。 B 私は、二十を過ぎるころまで、おふくろが書いた文字を見たことがなかった。自分のおふくろがどんな文字を書くのか知らなかった。

私は、郷里の高校を出ると、東京の大学に進学した。けれども、ガクcシcをもらつていた兄に不都合なことがあり、一年だけで中退して郷里へ帰つて、中学校の助教員を二年勤めた。それから、また一年間、受験勉強をして、同じ大学へ入り直した。ちよつと最初の級友たちが卒業したあとへ、私はまた一年生として入学したわけである。

私は、安い学生寮に入っていた。寮生はおおむね貧乏で、みな郷里からの送金を待ちかねていた。郵便配達が門を入つてくると、どの部屋の窓も一斉に開いて、「おれ、〇〇、来てない?」「××ある?」「そういう声が飛び交つた。私には、毎月二度に分けて、ぎりぎりの生活費が届いた。それにはいつも父の手紙が入っていた。父は若いころから

商家のチヨウボを付け慣れていて、達筆であった。文面も^I律儀^Iのもので、必ずどこかに浪費を戒める文句が入っていた。^A

ところが、あるとき、いつものようにして届けられた書留の封筒を開けてみると、いつもより少し少ない金額の為替といっしょに、ついで見慣れない^Yの手紙が出てきた。^I

『前略。お元気でしか。父さんがとちぜん病気で倒れますたすけに、わたすが代わって手紙を書きました。…』

手紙はそう書きだされていた。いうまでもなく、おふくろが自分で書いた手紙である。私は、おふくろは手紙など書けないと思っていたから、はらはらしながら読んでみた。父が脳軟化症で倒れたときの様子が、こまこまと書かれていた。手紙の常識にとらわれずに、自分の見たままを残らず知らせようとする文章が、^{II}期せずして迫力に富んだビョウシヤ^eになっていた。何事もまるで目に見えるように書かれていた。私は読み終わって驚いた。^ウ

おふくろの手紙は、^Zがまる出しになっているけれども、まず、よい手紙だといってよかった。よく見ると、鉛筆の文字には一つ一つに濃淡があり、芯をなめながら一字一字力をこめて書いたことがわかった。¹これだけの手紙を書くのに、おふくろは何日夜ふかしをしたらどうかと私は思った。鉛筆の尻で頭を搔いているおふくろが、目に浮かんだ。両腕を搔くぽりぽりという音が耳の奥によみがえった。

^エ父はもうとつくに亡くなって、おふくろは今年八十四になるが、今でも時々郷里から鉛筆書きの手紙をよこす。相変わらず芯をなめながら「しし」と書いた手紙で、いまだに^Zまる出しである。²甚だ郷愁をそそる手紙だといふほかはない。

(三浦哲郎「おふくろの筆法」より)

問一 傍線部 a、e と同じ漢字が用いられているものを、次からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ²³ ~ ²⁷。

- | | | | | | |
|---|----------------------------------|---|---|---|--|
| a | ヒン ¹ モク ²³ | ① | ヒン ¹ コン家庭に育つ。 | ② | 出題 ¹ ビンド ² の高い問題。 |
| b | ヨハク ²⁴ | ① | ハク ¹ ジョウな男性。 | ② | 答案用紙をハク ¹ シで出す。 |
| c | ガクシ ²⁵ | ① | ハク ¹ シンの演技。 | ③ | 親に黙ってガイ ¹ ハクする。 |
| d | チヨウボ ²⁶ | ① | シ ¹ ゼンを保護する。 | ④ | シ ¹ ミンの生活を守る警察官。 |
| e | ビョウシヤ ²⁷ | ① | 石油 ¹ シ ² ゲンを大切にする。 | ④ | 空手のシ ¹ ハン。 |
| | | ② | テチ ¹ ヨウに記入する。 | ④ | 環境をチ ¹ ヨウサする。 |
| | | ③ | 天皇は国のシ ¹ ョウチ ² ヨウだ。 | ④ | 自分の意見をシ ¹ ュチ ² ヨウする。 |
| | | ④ | 急なシ ¹ ヤメン。 | ④ | 古いコウシ ¹ ヤが壊される。 |
| | | ④ | カイシ ¹ ヤを辞める。 | | |

問二 空欄A・Bにあてはまる接続語として最も適切なものを次から選び、それぞれ番号で答えなさい。解答番号は

(28)・(29)。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|-------|
| A (28) | ① あるいは | ② しかし | ③ つまり | ④ さらに |
| B (29) | ① だから | ② すなわち | ③ すると | ④ そして |

問三 二重傍線部I「律儀」・II「期せずして」の意味として最も適切なものを次から選び、それぞれ番号で答えな

さい。解答番号は(30)・(31)。

- | | | |
|---------|----------|---------|
| I (30) | ① 厳しいこと | ② 完璧なこと |
| ③ 実直なこと | ④ 居丈高なこと | |
| II (31) | ① 驚くことに | ② 偶然に |
| ③ 心に響いて | ④ 予想した通り | |

問四

空欄X～Zにあてはまる語として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は(32)～(34)。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|-----------|--------|
| X (32) | ① 楽しみ | ② 得意 | ③ 苦手 | ④ 悲しみ |
| Y (33) | ① 筆書き | ② 鉛筆書き | ③ ポールペン書き | ④ ペン書き |
| Z (34) | ① 田舎言葉 | ② 関西言葉 | ③ 下町言葉 | ④ 山手言葉 |

問五

この文章からは、次の一文が抜けている。ア～エのどこに戻すのが適切か。番号で答えなさい。解答番号は(35)。

あのとぎの、あのおふくろの手紙が忘れられない。

- ① ア ② イ ③ ウ ④ エ

問六

傍線部1「これだけの手紙を書くのに、おふくろは何日夜ふかしをしたらどうかと私は思った」とあるが、その理由として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は(36)。

- ① おふくろは、ものを書くのにもいつもちびた鉛筆を使っており、手紙を書くわけではなく、いつも、忘れないためのちよつとしたメモのたぐいしか書いているのを見たことがなかったから。
- ② 父親の病気で倒れた緊急の事態に、なんとか息子にそれを知らせようと、いつもは書き慣れていない万年筆を使って、何度も書き直した手紙だということが見ただけで伝わってきたから。
- ③ ふだんは書くのにあまり時間はかからないはずなのに、父親が倒れたことであわてふためき、息子に父親の病気の状態を知らせる内容としての確かな文章を書くことに時間がかかったから。
- ④ 病気で入院した父親の看護に専念しなければならなかったが、父親の状態を息子に一刻も早く知らせなければならず、手紙を書き始めるも、なかなか思うように時間がとれなかったから。

問七

傍線部2「甚だ郷愁をそそる手紙だというほかはない」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は(37)。

- ① 田舎から遠く離れて暮らしている自分にとって、田舎で父母や近所の子供たちといた時の方が、自分の性に合っていると思っていたところに母親からの手紙がきて、無性に会いたくなったということ。
- ② 普段手紙を書かない母親の一生懸命に書いた手紙が心に残っており、その時と同じ言葉づかいで書かれた母親の手紙を見ると、いつも母親の姿と田舎のことがなつかしく思い出されるということ。
- ③ 田舎育ちの自分はいくら都会に住んでいても、どうしても自分のいる場所になじめず、いつか帰ろうと思っていたところに、母親からの手紙がきたので早く田舎に帰りたかったということ。
- ④ 昔住んでいた田舎の町では、近所との関係が密であり、安心することができたが、都会では全くそれがなため、寂しく思っていたところに、母親からの手紙が届き、なぐさめられたということ。

問八

本文に書かれている内容として適切でないものを次から選び、番号で答えなさい。解答番号は(38)。

- ① いつもは書いたことのない手紙を父親が倒れたことで、何日もかけて書いてくれた手紙から、母親の人柄が伝わってくる。
- ② 母親が父親の急変を息子に知らせようと、必死で書いて送ってくれた手紙が作者の心に響いたのが伝わってくる。
- ③ 自分の母親の手紙を基にして、作者の母親や田舎への思いが綴られており、作者と母親の心の交流が温かく伝わってくる。
- ④ 母親の手紙を通して自分の手紙に対する考え方や書き方について具体的に述べており、作者の誠実な生き方が伝わってくる。